

がん患者へのデス・エデュケーションとがん哲学カフェについて

栗崎由貴子¹⁾、五十嵐紀子²⁾、坂井さゆり³⁾

- 1) 新潟医療福祉大学 言語聴覚学科
- 2) 新潟医療福祉大学 社会福祉学科
- 3) 新潟医大大学院 保健学研究科

【背景・目的】近年、死の質 (quality of dying and/or death ; 以下 QOD) やデス・エデュケーション (death education ; 以下 DE) という見方からの死生観の問い直しが行われている^{1),2)}。従来は、生活の質 (quality of life ; QOL) やヘルス・エデュケーション (health education) を軸に「よく生きるとは」という視点に立っていたものが、社会構造の変化や医療診断技術の向上によって、「死」を強く意識せざるをえない状況へと変化し、「死」の語りも重視されるようになってきた。

日本には「人生とは何か」「死とは何か」「人間とは何か」といった教育が欠けているのではないかという疑問から「がん哲学外来」を開いた樋野³⁾は、がん患者にはカウンセリングでも患者会でもない新たな対話の場の必要なのだとして述べている。この対話の場として各地で開催されているのが「がん哲学カフェ」である。

本発表では、がん患者への DE の可能性を探るために、がん哲学カフェの意義を問う。そのために、まず、現代における DE の必要性を 20 世紀の「死への態度」の歴史の変遷から見出す。次に、現代における DE の重要性を示し、がん哲学カフェの意義を明確にする。

【方法】DE では「死への態度」の歴史の変遷を知ることが欠かせない。なぜなら「死」の概念は、社会的・行政的・法的变化、文化の影響などによって常に変化するからである。たとえば、かつては自然死が「死」であったが、現代では少なくとも、生物学的死、脳死、細胞死に区分されており、一言で「死」を表現することが難しい。そこで、20 世紀の死への態度の変遷を Philippe Ariès の“*L'HOMME DEVANT LA MORT*” (邦題『死を前にした人間』) の第 2 巻第 5 部「倒立した死」を参照することで、現代の DE についての考察を進めていく。

【結果および考察】Philippe Ariès による「技術社会における死の推移」は次のように変遷した。19 世紀まで「死」は社会的で公的な事柄として扱われ、そうした場で「死」を学ぶことができていた。しかし、20 世紀に入り、西洋の個人主義が主流となり、小市民化が進むと、社会的な臨終の場は存続されつつも、喪の悲しみを表現することはタブーとされるようになり、死への悲しみを表明する者は病的であるとさえみなされるようになる。

20 世紀半ばになると、病院での死が一般化する。また、

死に関する習俗の完全な倒壊が急速に進んだのもこの時代である。病院は人々の孤独な死に場所であり、「死」は社会から隠され管理される。Philippe Ariès は死の完全な医療化をスタイル・オブ・ダイイングと呼び、ここで歴史上「死」の新しい一類型が出現したと指摘する。彼によれば、20 世紀半ばでは医療技術により臨終を人為的に延長することが可能となったことに伴い、「死の定義」の変更が行われている。医療管理下における「死」は、「一種のミス」であり、「商売上の失敗」であり、「事故、無能力または不手際のしるし、忘れ去るべき刻印」とみなされた。医療スタッフにとって良い患者とは死ぬ素振りをみせない患者であった。また、家族は本人に「死」の予告をせず、「愛から出た嘘の尊重」によって人間関係を維持していたという。20 世紀半ば以降は、本人が自分の死について語ることは許されない時代であった。Philippe Ariès はこうした時代の変遷を踏まえた上で、「死の品位」のためには自己の状態を知ることが一つの条件であることを指摘している。当時は本人への「告知」の実現が先端的な取り組みであった。以上のように、20 世紀とは「死」を隠蔽し、その定義を変更し、医療的管理に適応する患者像を作り出す時代であったといえる。

さて、インフォームド・コンセントや告知が当然となった現代では、Philippe Ariès の時代よりもさらに個人主義が進み、本人の望みが尊重されるようになった。しかし、依然として死は社会的に隠蔽されたままであり、がん患者が告知を受けた瞬間から冷静に「死」と向き合うことは難しい。かつて「死」が医療の敗北とみなされたように、樋野によればがん患者は時に告知を「人生の敗北」と感じてしまう。こうした死のネガティブな面への注視を避けるためにも、現代では適切な DE の取り組みが求められるのである。「哲学カフェ」とは答えの出ない問いを考えるために視点の移動を学ぶ場である。したがって、がん哲学カフェはがん患者の DE の場として大きな役割を担っている。

【結論】20 世紀における「死の態度」の変遷から、現代における DE の重要性と、DE の場としてがん哲学カフェの意義を報告する。

【文献】

- 1) 柴田博：学際的な学問としての死生学，医療と社会，25 (1) : 9-20, 2015.
- 2) 服部健司：予防医学と臨床死生学のあいだ，医学哲学医療倫理，17 : 11-22, 1999.
- 3) 樋野興夫：がん哲学外来へようこそ，新潮社，2016.
- 4) Philippe Ariès : *L'HOMME DEVANT LA MORT* tome2, Éditions du Seuil, Paris, 1977 (邦訳成瀬駒男：死を前にした人間、みすず書房、1990).